

平成19年度「専修学校を活用した再チャレンジ支援推進事業」成果報告書

事業名	リスクマネジメントおよびそこに位置づけられた情報セキュリティ教育プログラムの開発と実施		
法人名	学校法人秋葉学園		
学校名	千葉情報経理専門学校		
代表者	理事長 秋葉 英一	担当者 連絡先	高山 佳久 TEL043-246-4211

1. 事業の概要

ビジネス環境の変化や競争の激化などの要因により、企業にとっては、リスクの予見や回避、改善などのリスクマネジメントに対する重要性は一段と増してきている。経営戦略レベルでマネジメントと情報通信技術（ICT）の融合が進む現在、リスクマネジメントを実践する上でも、情報セキュリティマネジメント（ISM）は、欠かすことのできないきわめて重要な要素と位置づけにある。ISMの不備により生じるリスクダメージは予想外に大きくなることが多く、その意味で、企業の組織の一員として、個々のビジネス系人材がISMの知識を深めることが重要な課題となっている。しかしながら、このようなスキル養成に向けた取り組みは緒についたばかりであり、本格的な教育体系は構築されていないのが現状である。

本事業では、ICTに必ずしも精通しているとは限らないビジネス系人材や組織内の幅広い人材、これから社会に出る人材、再チャレンジを目指す人材等を対象として、情報セキュリティに関する知識や技術の重要性を認識し、実践を通じて必要なスキルを体得させることを目的とした実践的かつ体験的な教育プログラムの開発を推進した。具体的には、実態調査、教育プログラム開発、講座実施の手順で事業を実施した。

2. 事業の評価に関する項目

① 目的・重点事項の達成状況

ITに精通していないビジネス系人材を対象とした情報セキュリティ教育や訓練体系について情報収集、整理を図った結果、これらの層に対する情報セキュリティ教育が非常に手薄であることがわかった。本事業では、その領域を埋めることが可能な教育プログラムを開発したことは、大きな成果であるといえる。

また、受講者に実施したアンケートの結果から、講義の内容に対して「興味を持てた」という受講者が30名（90.9%）、内容については「理解ができた」受講者が31名（93.9%）であった。また、本教育プログラムの特徴である実習やデモの実施についても、「わかりやすかった」という肯定的な回答だけであった。

今回開発した教育プログラムについては、受講者評価や講師の評価から有効であるとの評価を得ることができた。各テーマのレベルや使用されている題材についても大半の受講者から興味をもつことができ、理解できたとの評価を得た。

② 事業により得られた成果

教育プログラムの中核をなす教材の開発については、リスクマネジメントの全体像や情報セキュリティの概要、情報セキュリティマネジメントシステム（ISMS）の要素を含め、リスクマネジメントおよび情報セキュリティの重要性を示すとともに、それらに関する知識や技術を習得可能な実践的な内容構成とした。PCを活用した実習や講師によるデモを取り入れ、情報セキュリティに関する技術をより実践的な形式で取得可能な教材とした。

必ずしもICTに精通していないビジネス系人材を対象とするため、導入部分に事件や事故の事例を挙げ、取り組みやすい流れを作るとともに、講義の中でクラッキングの手法を実演するなど、興味を持たせることが出来る構成とした。

③今後の活用

実施委員や事業協力実施機関の協力を得て、本教材を用いた継続的な講座の実施の検討を進める。その他に、関係のある専門学校や企業に対して成果物を郵送し、教材の活用を呼びかけることとする。

④次年度以降における課題・展開

本教材を用いて指導や環境設定等、教える側にかかる負荷は少なくない。そこで、教える立場の教員等に対する「講座実施に関する講座」を開催し、本教材の趣旨や使用方法等について指導する必要がある。

3. 事業の実施に関する項目

①ニーズ調査等

本事業についての趣旨を鑑み、ITに精通していないビジネス系人材を対象とした情報セキュリティ教育や訓練体系について情報収集、整理を図り、カリキュラム開発や教材開発の参考となる資料を取りまとめた。

また、情報セキュリティの観点からリスクマネジメントに関する情報を収集、整理をし、本事業としてのリスクマネジメント教育の体系化を図った。

文献、インターネットを中心とした情報収集を行い、以下項目について報告書としてとりまとめた。

1. 情報セキュリティ定義
2. 情報セキュリティ評価制度
3. 情報セキュリティ資格
4. 情報セキュリティ研修
5. 情報セキュリティサイト

②教育プログラムの開発

必ずしもICTに精通していないビジネス系人材を対象とするため、導入部分に事件や事故の事例を挙げ、取り組みやすい流れを作るとともに、講義の中でクラッキングの手法を実演するなど、興味を持たせることが出来る構成とした。開発教材は、「講義用テキスト」、「実習用テキスト」、「講師手引書」の三分冊とし、講義と実習を並行して使用できる構成となっている。以下に各目次を示す。

○講義用テキスト

1. 情報セキュリティの必要性
2. 日常生活のセキュリティ
3. パソコン利用のセキュリティ
4. ネットワーク利用のセキュリティ
5. 情報セキュリティ
6. リスクマネジメント
7. 情報セキュリティポリシー
8. 知的財産権
9. セキュリティ関連の国際標準と法制度

○実習用テキスト

1. パソコン利用のセキュリティ
2. ネットワーク利用のセキュリティ

○講師手引書

1. 事前環境準備
2. ソフトウェアの準備
3. ハウツー解説
4. カリキュラム

③実証講座

eラーニング1日(6時間程度)、実習を含めた講座2日間を千葉、宮崎にて実施した。受講者数は33名(千葉11名、宮崎22名)であった。実施の詳細は以下の通りである。

<第一回>(千葉県:千葉情報経理専門学校)

事前学習(eラーニング) 6時間程度

平成20年1月30日(水)9:25~15:40

平成20年1月31日(木)9:25~15:40

<第二回>(宮崎県:宮崎情報ビジネス専門学校)

事前学習(eラーニング) 6時間程度

平成20年2月28日(木)9:25~16:00

平成20年2月29日(金)9:40~16:00

受講者に実施したアンケートの結果からは、講座に出席したほとんどの受講者(90.9%)が講義の内容に対して「興味を持てた」ということであった。また、内容理解についてもほとんどの受講者(93.9%)が「理解が持てた」と回答していた。実習やデモについても、「わかりやすかった」という肯定的な回答だけであった。実習やデモを取り入れた開発教材については、受講者評価や講師の評価から有効な教育手法であるとの評価を得ることができた。各テーマのレベルや使用されている題材についても大半の受講者から興味をもつことができ、理解できたとの評価を得た。

今回の実証講座では教材の対象となる受講者(必ずしもICTに精通していないビジネス系人材)を被験者とすることができなかったが、機会を設けて何らかの検証を試みていく必要もある。

④その他

必ずしもICTに精通していないビジネス系人材を対象とするため、開発教材は実習やデモを多く含めることとした。また、設定の手順等、文章だけではなく、画面の画像を取り込み、初心者であっても対策が取れる工夫を凝らした。テキストを講義用と実習用にわけているので、単独で使用することも併用することも可能となっている。